

# 揺るぎない ヴィンテージ

ネットワークプレーヤーを検討されていたのがきっかけでご来店頂いたK様。  
2年前、KLIMAX DSご試聴の折にあつたアメリカタンノイのオリジナル、ウィンザーGRFの佇まいに目を留められました。「ヴィンテージスピーカーに興味があつたわけではないのに、興味が湧いて聴いてみたら音にも衝撃を受けた」と、DSと合わせてご購入になりました。

音楽は枠にはめずに幅広く聴かれるK様。クラシック音楽向きというイメージの強かつたタンノイで、日本のポップス、しかも椎名林檎がすごくよかったという意外性は、持って初めてわかつたこと。アメリカタンノイならではのレスポンスのよさとリアルな再生は、「ジャンルを超えて楽しめる様の大きいスピーカー」と2年経った今も魅力は色褪せません。

今年4月に新しいクロックシステムになったKLIMAX DS2の情報量の多さはこのシステムでも際立って、パツハのオルガン曲ではスケールの大きさや深みが感じられ、ヴォーカルの質感や生々しさ、ピアノトリオのリズム隊の絡み、音楽の抑揚、全てにおいてグレードアップ。

最近、GRFのデザインを元にリスニングルームを改築されたのですが、KLIMAX DS2を聞きながら「こんな音にしたくてリフォームしたんだけど、これ(KDS2)で全て解決したね」とのこと。40年以上前のスピーカーですが、こうして今も魅了し続けるのは、製品が持っている「強さ」が、ホンモノだからに違いありません。

K 邸 America TANNoy Windsor GRF



最先端のデジタルプレーヤー LINN KLIMAX DS2(新基板)の大きな変化、表現力の高さを十二分に発揮する America TANNoy Windsor GRF。

M 邸 Brodmann VC7



プリメインアンプ OCTAVE V80 で駆動。新基板の DS は、低音の解像度、S/N がグレードアップ。

# たまやかな Brodmann

いつも聴かれているキース・ジャレットのケルン・コンサート。これをプロッドマン VC7で聴いて頂いたのは、偶然とは言わないまでも、お客様も私にも意図のないこと。というのは、KLIMAX DS/Kの新旧の比較の折に偶々接続されていたのがこのスピーカーだったのです。プレーヤーの比較のほうですが、そこから発せられる音に「なにこのスピーカー!」と驚かれたM様。「アタック音が凄くリアル。ホールで生の演奏を聴いているみたい・・・」その響きの美しさにたちまち魅了された様子。「正直、デジタルの技術やアンプの進化に比べて、スピーカーはそれほどでもないだろうと思っていたけど、これにはびっくり・・・」。弊店にご来店されてからは、JBLのC38 Baron、C37ローズ、ワーフェール W70を納めさせて頂き、ヴィンテージのスピーカー一辺倒でいらしたM様でしたが、このプロッドマンにはすっかりご心酔。「嫌な音が全くしない。スリムなデザインなのにどこから音が出るんだろうかと思うほど、音離れもいしスケール感が素晴らしい。」と手離しの賛辞を贈られます。

更に、8層塗りの美しい外観にも感心され、音とスタイルの両方を兼ね備えているスピーカーは他にない!!との惚れ込みみよう・・・プロッドマンが奏でる音楽の「生々しさ」は、他に例がありません。楽器の響きや録音されている場所の空気感が有機的で、まるで掴めるようなリアルティ。解像度や周波数帯域などの細かいことを忘れて音楽に聴き入ってしまう、いつしか生演奏を聴いている時と同じような気分になるのです。モノも情報も溢れた現代、知性的でしなやかな製品を送り出している数少ないブランドではないでしょうか。

今から200年以上前の1796年、ジョセフ・プロッドマンにより、ウィーンのピアノ製作所として創業。かの有名なベーゼンドルファーも元はプロッドマンに弟子入りして技術を学んだのです。2008年にプロッドマン社がベーゼンドルファーのオーディオ部門を買収し改良を重ね、工程や工場も新たにスピーカーブランド「プロッドマン」として生まれ変わりました。上位機種種の「ヴィエナクラシック (VC)」シリーズとミドルレンジで構成された「フェスティバル (FS)」シリーズで展開。最大の特徴は設計者であり音響エンジニアのハンス・ドイツが開発した「ホーンレゾネーター」。スピーカーの底面に開口を設け、そのスリットがローパスフィルターとして機能するというもので、吸音材も一切なし。パスレフやトランスミッションとは異なる手法で、非常にナチュラルで豊かな低域再生を実現、そうまるで楽器の響きがするのです。ピアノメーカーの出自につき、ピアノの再生が得意なイメージが伝わりますが、自然で艶やかな響き、深く穏やかな低域、反応のいい2ウェイ構成、オールラウンドな実力を備えとりわけアコースティックなものはえも言われぬ美しさです。仕上げは、8層塗りのほぼ完璧な鏡面仕上げ。ピアノ作りの技術が生きています。一番小型のスピーカーにもグランドピアノと同じ仕上げが施されているほど。スピーカーは嗜好品だと、改めて思います。



店頭では VC1、VC7 など色々なモデルがご試聴頂けます



中央が C33。左は C38 Baron。左奥は Jensen 1200XLM

ネットワーク N200。3点切り替えのアッテネータースイッチが付属

シカゴのコレクターから放出された、大変なレアものの JBL C33/D1004。1954年から55年に作られた記念すべき JBL 大型システムの第一号機です。当時のハイエンド・コンシューマー向けで、現代の DD66000 の元祖と言うべきもの。構成は D130A (38cm) ダブルウーファー、ドライバーは 175、ネットワークは N200。それら全てが初期型の製造年の近いグレーンゲネチャータイプで揃えられた逸品。ペアで揃うことなど滅多にない時代のもので超希少品です。底面に小さい開口があるパスレフ型で、米松のよく乾いたキャビネットにマホガニーの突板で仕上げられています。シナトラとエリントンの「Follow Me」を聴けば、黄金時代のアメリカの輝かしさがどこからともなく立ち上ります。C33の圧倒的な度量の大きさ、伸びやかさは、この後の JBL の発展を予感させています。

